

評価を崩す必要がある。言語だけでなく、身体性を含むプロセスとやりとりの中で、人間としての喜びを感じる。それが大切だ。子どもたちからは、立ち止まって考え、

自分を語る時間が奪われている。教育実践の中で対話が目的化すると、対話のスキルに終始してしまつ」と語った。

多田氏は、「深い対話と浅い対話がある。浅い対話は言葉は多いが、絡み合っておらず、関わり合いが深まらない。深い対話には、時に深い沈黙がある。それは省察の静けさであり、他者と関わり、自分を見つめていく時間。意見が異なる他者とも、深い対話は可能。先だって学生たちが「自分たちは本当に語り合ってきたのか。対話してきたのか」と話し合っていた。教育の本質は、対話の中で学習者が成長し、変わっていく営み」と話した。

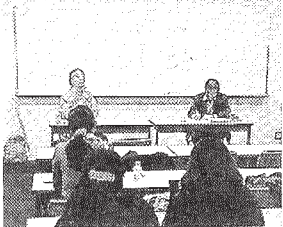
立ち止まって考える時間を

言語文化教育研究会対談で

深い対話の中で成長が本質

「子どもたちが立ち止まって考える時間が奪わ

れ対談する細川氏（左）と多田氏



れている」と細川英雄氏。

「深い対話の中で学習者が成長していく。それが教育の本質」と多田孝志氏。

「教育実践における『対話』とは何か」をテーマとした公開対談が、言語文化教育研究会の特別企画として、早稲田大学で、さきごろ開催された。細川氏は、言語文化研究所八ヶ岳アカデメ

イア主宰。多田氏は、白大学人間学部児童教育学科長・教授。

細川氏は、長らく日本語教育に携わっていくうちに、日本語の多様性から「正解がある」との発想を崩す「必要性を痛感。「学校教育でも、1つの正解がある」との行き方や